

パッションとトポス

河 邊 泉

幼児三人が黙々とスコップで砂を盛りあげている。ひとりの子どもがスコップを手離したかと思うと素手でトントんと盛り砂を叩く。小さな手型がついたかと思うとまたその上から砂が盛られ、小さな両手の上に砂がふりかかると叩く手を休めない。そこに先生が来られる。「あら、山つくっているの。……Mちゃんは どうして叩いているの?」「あのね、だって固くしないと崩れるから……くじらのように大きい大きい山にするの。」「あっそう、ちょっとみんな、Mちゃんは山がくずれないように手を叩くのだって……」

先生には小さな手で叩いている動きが目についてその意味が知りたかったのだろうか。

山をつくっているのだと見てきくと砂山が崩れないように叩いているのでは……と自分で思ったことを一度、確かめて見たかったのだろうか。山だと思えてわかって終ると叩いていることにのみ目が奪われて終い、くじらのような大きな山を作りたいと言う力強い心の叫び声がきこえてこなかったのではと思う。

保育者が子どもひとりひとりのどんな小さな動きをも、見逃さずありのままを肯定してかかわろう

とされる姿に将来を期待する反面、「行為の理由づけ」に忠実になる前に、子どもの大きな山にした
いというパッション（情念）に耳を傾けることができたなら、きっと山づくりに一層のはずみがついた
だろうと思う。

保育の中で意識にかかわることはしても、心の深層に耳を傾けることにはどうも弱いのではなから
うか。

X X X

大きな砂山ができた。残そうか。残して置いても誰かが来て崩して終うかも知れない。

だれかが放送してみんなに言えばよいという。放送という言葉に触発されてアメリカへも、アフリ
カへもかと急に話が飛躍的に広がる。砂をほうりあげながらの会話に魅了される。結局、リーダー的
な児が頂上の砂をすくいとったはずみに、どっと倒れかかるように砂を崩しにかかる。殆んど崩れた
時Y児が「おい迷路の城をつくろう」といって小さなスコップで溝のようなものを掘っていく。そこ
へ先生が来られて「さあ、みんなかたづけにしましよ」と告げられる。一目散に手洗い場に駆けて行
く子、砂場から離れにくそうにスコップで砂をつつきながら立ち去る子。様々だがみんな立去ったあ
とにY君と先生が残る。先生は日頃からY君のことがわかっていられるかのように「クラスで待っている
から、あとのんだよ」と言っ行って行って終われた。ひとりになったY児に私は即座につきあってみた
くなった。（保育者と了解をとっていなかったことに対する逡巡もあったが……）きつと側に居るだ
けでもよい。そして鑑賞させてもらうだけでもよいと思った。ゴールができた時止めるかも知れない

とも考えた。やっとゴールができ「ここがゴール。ここにお城があるの」と小さなこぶのような形をつくり指で穴をあけた。もう止めるかと思ったとたん、私に向って「この城の中どうなっているかわかる？」と尋ねて来た。「さあどうなっているかな」と応えようと「わからないだろう。むつかしいぞ」と言って今度は小さな指先を動かしながら「ここを通過して行くの。ここにあり地獄があつて危険なの。落ちないように通るの。そしてここが終点。」と道のような筋を引いて行く。「危険なところがあつてむつかしいのだね」と共鳴すると「うん、もう一度スタートから迷路を行こう」と小石を持って迷路をたどり城まで来た時、急に「さあ帰ろう」と立ちあがり、「おじさん明日も来る。」と聞いて来た。……私自身いつの間にか一緒になつて危険な迷路をさまよひあるいたような気持ちになつていた。

迷路の城の象徴するものについてはいろいろ仮定することはできるが、わからなくても側で鑑賞するだけでよいと思う。一緒に子ども話の中の人物になつて、そのものと二人で共有できれば二人で共鳴しながら了解しあうこともでき、そうした関係の中で自然に子どもは真の自己を語るようになる。同時に安定もする。保育の中で私たち保育者に理解しにくいことを見せつけたり、またくりかえし同じことを続けるような場合「どうしてこんなこと……」をと思つた時こそ、子どもの心層にふれることのできるトポス（場）だと心得るべきだと思う。また保育で最も心すべきことは保育者にとつてわけのわからないところに子どもたちのパッションを感じとることではなからうか。

あと二ヵ月で保育者の側の保育の節目をむかえられるのだが、子どもたちの成長の節目は常にいたるところにあることを忘れないようにしたい。

（洗足学園短期大学）